

ヨナ書1-4章 「許し難い神の憐れみ」

1A 召命から逃げる預言者 1

1B 正反対の町 1-3

2B 船底での睡眠 4-9

2B 海への投棄 10-17

2A 死から救われた祈り 2

1B 海底にまで行くヨナ 1-6

2B 聖なる宮に届いた祈り 7-10

3A 悔い改める異邦人 3

1B 四十日の滅亡 1-5

2B 王と民の悔い改め 6-10

4A 怒る預言者と慰める神 4

1B 憐れみへの怒り 1-4

2B とうごまを惜しむ心 5-11

本文

ヨナ書を開いてください。ヨナ書は非常にユニークな書物です。そして、私はヨナが好きな預言者の一人です。けれども、「神の召命から逃げ、神の命令に反抗し、そして怒り落ち込むヨナがなぜ好きなのか？」と思われる方もいるでしょう。けれども、そのヨナのそばにいて、彼に忍耐して教えておられる神、そして何よりも、あの残虐で高慢なアッシリヤ人を赦したいと願われる、神の憐れみがこの書には前面に出ているからです。

この預言書は神のユーモアと言っても良いかもしれません。その他の預言書は、「主の御告げ」と言って、主のイスラエルやユダに対する、または諸国に対する言葉が書かれています。けれども、ヨナ書は、その神の言葉が初めから途切れています。語るべきヨナが、それを語るまいと逃げてしまったからです。そして多くの人はヨナの不従順を責めます。けれども、背景を知れば、実に私たちがすぐに陥っている問題、誰もが抱えている問題であることが分かるからです。

それは一重に「神の憐れみ」があまりにも深い、ということです。罪人を救いたいと願われる神の憐れみがあまりにも深いので、憐れみを求める不完全な私たちでさえ、腹立たしくなるのです。なぜ、このような悪いことをしている人を神は、ただ悔い改めようとしているだけで赦されるのか？と思っていたらしくなるのです。また、自分が神に対してきちんと仕えているつもりなのに、そうではない人に対して神が大きな寛容を示されると、腹立たしくなる時さえあります。ちょうど、放蕩息子の帰りを大喜びする父に対して怒った兄息子のように、私たちは許しがたいと感じます。今日は、神の大きな心、広い心を学びます。

1A 召命から逃げる預言者 1

1B 正反対の町 1-3

1:1 アミタイの子ヨナに次のような主のことばがあった。1:2 「立って、あの大きな町ニネベに行き、これに向かって叫べ。彼らの悪がわたしの前の上って来たからだ。」1:3 しかしヨナは、主の御顔を避けてタルシシュへのがれようとし、立って、ヨツパに下った。彼は、タルシシュ行きの船を見つけ、船賃を払ってそれに乗る、主の御顔を避けて、みなといっしょにタルシシュへ行こうとした。

ヨナについての紹介をします。彼が神から預言を受けた背景を良く知ることのできる一節が、聖書の中にあります、列王記第二 14 章 25 節です。「彼は、レボ・ハマテからアラバの海までイスラエルの領土を回復した。それは、イスラエルの神、主が、そのしもべ、ガテ・ヘフェルの出の預言者アミタイの子ヨナを通して仰せられたことばのとおりであった。」この彼とは、ヤロブアム二世のことです。私たちは既に、ホセア書とアモス書において、その背景がヤロブアム二世の時であることを学びました。北イスラエルがダビデとソロモンの時のように、大きな領土を有して、豊かになっていた時に、ホセアもアモスも預言を行いませんでした。ヨナはその王国の拡がりを前もって預言した人です。彼は、「ガテ・ヘフェルの出」であるとあります。この町はゼブルン族の割り当て地の中にあり(ヨシュア 19:13)、イエス様が育ったナザレの町から数キロしか離れていません。ですからイエス様が、ご自分の甦りのことを話す時、ヨナの徴しかないとパリサイ人たちにお話しになった時、同郷の人としての思いが、もしかしたらあったかもしれません。

ヨナの預言したイスラエルの領土拡大ですが、アッシリヤの動きと深く関係しています。同時代のアッシリヤの王、アダド・ニラリ三世がダマスコまで攻めてきました。けれども内政で問題が起こって、そこへの支配権を強めることはできませんでした。そこにイスラエルの王が支配権を広げていったのです。それでヤロブアム二世が治めていた時に、ダビデ・ソロモン王朝の支配圏とほぼ同じ領域を支配するようになりました。

けれども、いつまたアッシリヤがこちらに侵略してくるか知れません。事実、ホセアとアモスはアッシリヤにとってイスラエルが滅びることを預言していました。つまり、ヨナは、同国の民を滅ぼしてくるであろうアッシリヤ人に預言を語らなければいけなかったのです。しかも、彼は主をよく知っていました。なぜヨナが主の命令に従わなかったのか、ニネベに行くことを拒んだのかが分かる一節があります。4 章 2 節です、こう祈りました。「ああ、主よ。私がまだ国にいたときに、このことを申し上げたではありませんか。それで、私は初めタルシシュへのがれようとしたのです。私は、あなたが情け深くあわれみ深い神であり、怒るのにおそく、恵み豊かであり、わざわざを思い直されることを知っていたからです。」ヨナは、主が憐れみ深い方であることをよく知っていたのです。しかし、その憐れみは、これから自分たちを滅ぼすかもしれない相手に注がれようとしているのです。自分の家族を仮に殺害した犯人がいるとします。自分の家族は信仰を持っていなかった、けれども相手は改心して、キリスト者になった。罪赦され、天国に行く確信がある。けれども、自分の殺された家族は天国に行く確信はない、ということであればいかがでしょうか？ヨナは、アッシリヤ人が滅

ぼされなければ、イスラエルが危うい。けれども、そこに神の預言を語ることは、彼らが悔い改め、救われ、そしてその国がイスラエルにやって来ることではないか？そんなことは、絶対にできない！という、同胞の民を思う思いからだったのです。

さらに、ニネベに神の言葉を語りに行くことを拒んだ理由があります。アッシリヤはひたすら残虐な国民でありました。私たちはヨナ書を、恐ろしいことも文字通り受け入れることができます。そのニネベと言えば、今のイラクの第二の都市モスルの郊外にあります。そうです、イスラム国の拠点となった都市です。そこでイスラム国が行なった数々の残虐な仕打ちは、古代のアッシリヤ人を彷彿とさせるものでした。いや、かつてのアッシリヤ人のほうが残虐だったかもしれません。彼らは、自分たちが征服した民を残虐な仕方に取り扱うことによって、周囲の国々に恐怖を呼び起させました。文字通りの「テロリスト国家」でした、被征服民の手足を切り、目を抉り出し、また捕え移す時は鉤を口につけて引いて行ったりしました。また、見せしめに人間串刺しを行ない、また生きてまま皮剥ぎを行なったりしました。そんなことを行なった彼らが、救われてはいかんのだ！とヨナは思ったのです。

ヨナは、「主の御顔を避けた」とあります。二度も書かれています。これを理解するには、アッシリヤの首都ニネベと、彼が乗った船の行き先タルシシュの位置関係を知る必要があります。ニネベは、イスラエルからはるか東方にある、ティグリス川の河畔の町です。900 キロほど離れています。そしてタルシシュは、スペインにある町です。地中海貿易のおける、まさに果ての、果ての町であり、当時の世界の「地の果て」の西方の町です。イスラエルから約 4000 キロ離れています。ですから正反対の方向に、今の言葉で言うなら「地球の裏側」までヨナは逃げるつもりだったのです。しかし、ヨナが忘れていたのは主の御顔を避けることはできない、私たちの神が遍く存在する方、偏在の神だということです。どこに行っても、主はおわれます。そして、神の福音を預かっているものは特に、主は「わたしは共にいる」という約束があります。「わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたとともにおられます。(マタイ 28:20)」

そしてヨナ書は、実に新約聖書の異邦人への宣教に深くかかわっている預言書です。ヨナは、タルシシュ行きの船に乗るのに、ヨッパの港に行っています。当時のイスラエルにある地中海への船はヨッパ港からでありましたが、使徒の働き 10 章にヨッパにいるペテロの姿があります。彼は皮なめしシモン家にいました。彼は他のユダヤ人と同様に、一日三回の祈りの真ん中の正午の祈りを捧げるために、屋上に上りました。空腹を覚えましたが、下で食事の用意がなされている間に、うっとり夢心地になりました。すると、天が開けて、なんと大きな敷布のような入れ物が降りて来て、そこに四つ足の動物や、這う物、空の鳥などがいました。そして「屠って食べなさい。」という声がするのです。ペテロは、「主よ。それはできません。」と言いました。主からの命令であることが分かっていたのに、「それはできません。」と拒んだのです！そして、「私はまだ一度も、きよくない物や汚れた物を食べたことはありません。」と答えたのです。レビ記 11 章にある食物規定は、イスラエル人に与えられたものであり、それは異邦人から聖め別たれるための戒めであり、ペテロ

は自分はそれらの不浄の動物によって自分を汚したことはない、と言ったのです。しかし、主は、「神がきよめた物を、きよくないと言ってはならない。」と戒められました。(使徒 10:9-16)それは、異邦人コルネリオが、ペテロから福音の言葉を聞いて、信じて救われるためだったのです。それで、地の果てに向かう宣教、イエス様が約束された聖霊の働きであり、「地の果てにまで、わたしの証人となる」という宣教が始まるのです。

ところで、「ヨナ」という名前は「鳩^{yonah}」を意味しています。鳩と言え、ノアの箱舟の時の鳩を思い出します。それは、神が水で地を裁かれた後の、新しい世界を造られる象徴であり、地における平和と和解を示しています。イエス様が宣教の時に、「鳩のように優しく、蛇のように聡くなりなさい。」と言われたところにもつながります。つまり、ヨナの預言者としての使命には、ペテロがそうであったように、異邦人との和解も象徴し、また敵との和解も象徴しています。この使命を帯びていたのですが、ペテロが「主よ、それはできません」と言い、またヨナははっきりと、ニネベではなくタルシシュに行こうとしたところに、彼の主に対する不従順が現れているのです。

2B 船底での睡眠 4-9

1:4 そのとき、主が大風を海に吹きつけたので、海に激しい暴風が起こり、船は難破しそうになった。1:5 水夫たちは恐れ、彼らはそれぞれ、自分の神に向かって叫び、船を軽くしようと船の積荷を海に投げ捨てた。しかし、ヨナは船底に降りて行って横になり、ぐっすり寝込んでいた。1:6 船長が近づいて来て彼に言った。「いったいどうしたのか。寝込んだりして。起きて、あなたの神にお願いしなさい。あるいは、神が私たちに心を留めてくださって、私たちは滅びないですむかもしれない。」

ヨナ書において興味深いのは、ヨナは自分の強い意志で神に逆らっているのですが、神のヨナを用いられる意志はさらに固いということです。「主が大風を海に吹きつけた」とあります。イエス様の弟子たちのことを思います、「あなたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それはあなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためであり(ヨハネ 15:16)」とイエス様が言われました。主は、ヨナを選び、召し、そして異邦人の救いのための預言者として用いられているのです。それだけ、主は異邦人を憐れみ、救いたいと願われています。ここで水夫たちは、それぞれ「自分の神に向かって叫」んでいるとあります。まさに、「困った時の神頼み」であり、自分たちの命が失われることを真剣に思いました。それで必死に祈ったのです。そして、このことによって彼らが主なる神を知るようになります。

その反面、ヨナはなんと、「船底に降りて行って横に」なっています。ここでヨナが、主の命令に反発して、反抗しているので、どんどん下っていることに気づきます。イスラエルの山地で主に命令を出されて、それでヨツパに下りました。そして船に乗ったら、船底に降りました。そしてこれから、彼は海に投げ込まれます。そして魚の腹の中で海底のところまで下ります。そして彼は祈りの中で、「山々の根元まで下り」と言っています(2:6)。そしてついに、陰府という言葉、穴という言葉

使います。彼はどんどん下っていき、地の中にある陰府を感じ取っていたのです。そして、彼は「ぐっすり寝込んで」いますが、イエス様の舟で寝てしまわれたのとは対照的ですね。イエス様はガリラヤ湖での嵐の中、ぐっすり寝てしまわれましたが、それは父なる神に完全に拠り頼んでいる安息の姿でした。ヨナのそれは、神に完全に逆らっている怒りと落ち込み、自暴自棄の姿です。

そして船長までが、これは只事ではない、この嵐は人間の能力では到底、太刀打ちできないものだと悟りました。それで彼も自分の船長としての能力を放棄して、神に拠り頼みました。けれども、もちろんこの時点では自分の異教の神です。おそらく彼らはツロなどの、フェニキア地方の人たちですから、カナン系の神々を呼び求めているのでしょう。そしてヨナにも、何をぐっすり寝ているのかとたしなめています。

1:7 みなは互いに言った。「さあ、くじを引いて、だれのせいで、このわざわいが私たちに降りかかったかを知ろう。」彼らがくじを引くと、そのくじはヨナに当たった。1:8 そこで彼らはヨナに言った。「だれのせいで、このわざわいが私たちに降りかかったのか、教えてくれ。あなたの仕事は何か。あなたはどこから来たのか。あなたの国はどこか。いったいどこの民か。」1:9 ヨナは彼らに言った。「私はヘブル人です。私は海と陸を造られた天の神、主を礼拝しています。」

イスラエルの民も、くじによる主の御心を知ることがありましたが、異邦人の中にもあったようです。まことの神を知らぬ異邦人ですが、そこに主が介在されました。ヨナに当たります。そして職務質問のように、続けざまに聞きます。誰のせいなのだ、あなたの仕事は、あなたの国は、あなたの民族は？と尋ねています。するとヨナが、彼らにとって驚くべきことを言いました。ヘブル人です。ヘブル人と言えば、カナンの地に入って来た者たち、ヨルダン川を渡り、カナンの王たちをことごとく破った神です。そして、「私は海と陸を造られた天の神、主を礼拝しています。」と言いました。この信仰告白だけが、彼らを怯えさせました。では、この嵐を引き起こしているのはまさしく、この神のせいではないか、と思ったのです。そして彼らの回心へと導かれるのです。

2B 海への投棄 10-17

1:10 それで人々は非常に恐れて、彼に言った。「何でそんなことをしたのか。」人々は、彼が主の御顔を避けてのがれようとしていることを知っていた。ヨナが先に、これを彼らに告げていたからである。1:11 彼らはヨナに言った。「海が静まるために、私たちはあなたをどうしたらいいのか。」海がますます荒れてきたからである。1:12 ヨナは彼らに言った。「私を捕えて、海に投げ込みなさい。そうすれば、海はあなたがたのために静かになるでしょう。わかっています。この激しい暴風は、私のためにあなたがたを襲ったのです。」

ヨナの確信的な言葉が凄いです、これは自分のためにあなたがたに襲ってきている、と断言しています。ヨナという預言者は、神を知らない人ではありませんでした。むしろ、神の友とまでいきませんが、それに近い関係を持っていました。ちょうど、同労者の内部事情のようなものです。上司

が部下に内々に命じたことを部下が背いています。そして周りの人々が影響を受けて、迷惑を被っているという感じです。ヨナは、神が嵐をも起こされる方であることを知っているのです。それでも、自分はニネベに行くつもりはないと決めています。だから、預言を語るよりは死んだほうがよいと思ったのです。

1:13 その人たちは船を陸に戻そうとこいだがだめだった。海がますます、彼らに向かって荒れたからである。1:14 そこで彼らは主に願って言った。「ああ、主よ。どうか、この男のいのちのために、私たちが滅ぼさないでください。罪のない者の血を私たちに報いないでください。主よ。あなたはみこころにかなったことをなさるからです。」

彼らは、ヨナのいうとおりにすることに、ものすごい抵抗を覚えています。もし、天地を造られた神の預言者を海に投げ込むものなら、自分たちがどのような罰を受けるか知れないと思ったのです。だから、なんとかして陸に戻そうとしました。けれども、ますます荒れます。彼らも絶体絶命になって、ついにヤハウェなる神ご自身に祈るのです。自分たちにこの男の血の報いを与えないでください、と願っています。そして何と、主よ、と呼びかけています。聖書には何と書いていますか、ヨエル書に、「主の名を呼ぶ者はみな救われる。(2:31)」とありました。

1:15 こうして、彼らはヨナをかかえて海に投げ込んだ。すると、海は激しい怒りをやめて静かになった。1:16 人々は非常に主を恐れ、主にいけにえをささげ、誓願を立てた。

イエス様が風にしかりつけた時に、湖は凧になりました。それと同じように静かになりました。そして何と、ここで彼らはちょうど、イスラエル人が紅海を渡って、エジプト人たちが岸辺で死んでいるのを見て、主を恐れて、モーセと主を信じたように、彼らも今、主を恐れ、いけにえを捧げました。誓願を立てたとありますが、これは今でいうならば、決心したということです。ヨナの不従順を通してまで、主は異邦人をご自分に立ち帰ることをなさいました。主が、このように異邦人をお救いになりたいという強い願いと意志があることが分かります。だから、ヨナが召しに不従順であったとしても、それでも主がそれをも用いられて恵みの働きを行われます。そしてよくよく考えれば、ユダヤ人がイエス様を信じるのを拒んだため、その不従順によって異邦人に神の救いが広がったのですね。「かえって、彼らの違反によって、救いが異邦人に及んだのです。(ローマ 11:11)」

私たちはとかく、伝道の成功や失敗、その結果を語り、これこれをしていないからいけないのだ、という反省をします。もちろん、主の証しをしっかりと立てることができたのかという点検は必要です。しかし、それはあたかも、宣教の働きが私たち人間にかかっているかのように聞こえます。いいえ、主が行なわれるものです。主が恵みをもって御霊によって働いてくださるのです。

1:17 主は大きな魚を備えて、ヨナをのみこませた。ヨナは三日三晩、魚の腹の中にいた。

主は、ヨナを死なせませんでした。これはさすがに、ヨナの意表を付いたでしょう。けれども、海で溺れ死ぬことはないのですが、魚の腹ですから、そうした悪環境に投げられたことになりま。そしてこの「三日三晩」がとても大切です。これから見ていく、ヨナの腹の中での祈りに、「陰府」という言葉が出て来ます。ヨナが陰府に下るような体験をしたけれども、それでも生還したという奇蹟が起こります。そこで、イエス様は天からの徴を求めたパリサイ人たちに対して、ヨナの徴以外のことはもう起こらないと断言されたのです。「マタイ 12:39-40 悪い、姦淫の時代はしるしを求めています。だが預言者ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられません。ヨナは三日三晩大魚の腹の中にいましたが、同様に、人の子も三日三晩、地の中にいるからです。」イエス様が十字架に磔にされ、死んで葬られ、そして三日目に甦るという徴を、ヨナの徴は指し示していました。

2A 死から救われた祈り 2

1B 海底にまで行くヨナ 1-6

2:1 ヨナは魚の腹の中から、彼の神、主に祈って、2:2 言った。「私が苦しみの中から主にお願いすると、主は答えてくださいました。私がよみの腹の中から叫ぶと、あなたは私の声を聞いてくださいました。

主のヨナに対する愛がここにあります。主は、ヨナの不従順に対して、彼が主に立ち返ることができるように、魚の腹の体験をさせました。彼はここまでして、初めて祈りを捧げることができるようになりました。

そしてそこは、陰府とも言うべき暗闇の世界です。しかし、これは慰めのメッセージです。たとえ陰府のような世界、死の世界、全く何も見えない世界であっても、それでもそれは主が備えてくださったものであり、主がそこにおられるということです。ダビデが祈りましたね、「詩篇 23:4 たとい、死の陰の谷を歩くようなことがあっても、私はわざわざいを恐れませぬ。あなたが私とともにおられますから。」

2:3 あなたは私を海の真中の深みに投げ込まれました。潮の流れが私を囲み、あなたの波と大波がみな、私の上を越えて行きました。2:4 私は言った。『私はあなたの目の前から追われました。しかし、もう一度、私はあなたの聖なる宮を仰ぎ見たいのです。』と。2:5 水は、私ののを絞めつけ、深淵は私を取り囲み、海草は私の頭からみつきました。2:6 私は山々の根元まで下り、地のかんぬきが、いつまでも私の上にあります。しかし、私の神、主よ。あなたは私のいのちを穴から引き上げてくださいました。

ヨナが大魚の腹の中で体験したことです。潮の流れ、海草が頭に絡みつくと、そして山々の根元と言っていますから、海底にまで降りて行ったのでしょう。そして陰府とは、地の中、海の下にあるとされます。そのような苦しみの中で、初めて聖なる宮、すなわち主のおられるところに祈り叫んだのです。

2B 聖なる宮に届いた祈り 7-10

2:7 私のたましいが私のうちに衰え果てたとき、私は主を思い出しました。私の祈りはあなたに、あなたの聖なる宮に届きました。2:8 むなしい偶像に心を留める者は、自分への恵みを捨てます。2:9 しかし、私は、感謝の声をあげて、あなたにいけにえをささげ、私の誓いを果たしましょう。救いは主のものです。」

午前礼拝の説教を思い出してください、ヨナの悔い改めの祈りです。第一に、主を思い出しました。そして、祈りが聞かれたという確信が、まだ魚の腹の中にいる時に与えられました。第二に、自分の偶像を知りました。主の命令に従わないということは、主ご自身よりも自分の願っている事、思っていること、強く信じていることがあります。ヨナは、イスラエルを思う愛国心が、イスラエルを愛する神ご自身よりも、大事になってしまったのです。そしてそれは、自分の恵みを捨てること、自分を苦しめるだけになることを知りました。第三に、感謝の声を、誓いを既に腹の中で捧げたということです。状況が良くなったから、ではなく、良くなる前に神のところに彼は来ています。

2:10 主は、魚に命じ、ヨナを陸地に吐き出させた。

嵐を起こされたのも主、魚を備え、飲み込ませたのも主、そして魚に命じ、陸地に吐き出させたのも主ご自身です。こんなにも、主はヨナに取り計らいをされています。そして主の働き人、主に仕える者には、主はここまでの細かい取り計らいをしてくださいます。そして、このような三日三晩の死者の中からの生還のような出来事は、後にユダヤ人のみならず、「すべての国民を弟子としない」と命じられる、イエス様ご自身の三日目の、死からの甦りを示しているのです。

3A 悔い改める異邦人 3

1B 四十日の滅亡 1-4

3:1 再びヨナに次のような主のことばがあった。3:2 「立って、あの大きな町ニネベに行き、わたしがあなたに告げることばを伝えよ。」3:3 ヨナは、主のことばのとおり、立ってニネベに行った。ニネベは、行き巡るのに三日かかるほどの非常に大きな町であった。

「再び」と主は言われます。主は、二度、また三度、同じように立ち直り、再出発させる恵みを持っておられます。そしてヨナは、ここで従順になっています。主から言われたことに、従います。それから、ニネベですが「あの大きな町」とあります。遺跡としても、町の内壁が、幅が 15 ㍎、高さが 30 ㍎、そして周囲は 13 ㍎ほどある巨大なものです。そして外壁は周りの空き地や町々も全て網羅したものであり、行き巡るだけで丸々三日かかるほどのところでした。ところで、ニネベは創世記 10 章で、あの主に反抗する権力者ニムロデが建てた町の一つです(11 節)。ですから、主に反抗する権力者の体質は残したままで、アッシリヤはその町に都を再建したのでしょうか。

3:4 ヨナは初め、その町にはいると、一日中歩き回って叫び、「もう四十日すると、ニネベは滅ぼされる。」と言った。

これだけです、たったこれだけです。四十日で、ニネベは滅びる！であります。ここには、何ら神の忍耐や憐れみ、恵みの言葉はありません。しかし、たったことだけの言葉でニネベの人々は、悔い改めます。

2B 王と民の悔い改め 5-10

3:5 そこで、ニネベの人々は神を信じ、断食を呼びかけ、身分の高い者から低い者まで荒布を着た。3:6 このことがニネベの王の耳にはいると、彼は王座から立って、王服を脱ぎ、荒布をまとい、灰の中にすわった。3:7 王と大臣たちの命令によって、次のような布告がニネベに出された。「人も、獣も、牛も、羊もみな、何も味わってはならない。草をはんだり、水を飲んだりしてはならない。3:8 人も、家畜も、荒布を身にまとい、ひたすら神にお願いし、おのおの悪の道と、暴虐な行ないとを悔い改めよ。3:9 もしかすると、神が思い直してあわれみ、その燃える怒りをおさめ、私たちは滅びないですむかもしれない。」

物凄い立ち返りです。霊的覚醒、リバイバルです。なぜここまで、皆が、王も民も全てが、悔い改めに臨むことができたのでしょうか？しかも、民からまず自発的に悔い改めており、それから王が悔い改めの布告を出しています。王による強制的なものではありません。歴史的に見ますと、ヨナがここに来る前に、二つの災いがニネベを襲っています、紀元前 765 年と 759 年です。そして完全な皆既日食が、763 年に起こっています。このような徴があり、それでヨナがやって来たとするれば、彼らは本当に神が怒っていて、自分たちを四十日のうちに滅ぼそうとしておられるのだと思っただのかもしれませんが。けれども、もちろんその原因は分かりません。

しかし主は、ご自分の時、満ちた時にある民に対して、ある国に対して、またはある地域、ある年齢層に対して、あるいはある宗教のグループに対して、恵みによってご自分の御霊を強力に注がれることがあります。この王の発言は、異教徒であることをよく表していますね。人に対してのみならず、家畜にも、荒野をまとわせ、神にお願いするようにさせています。けれども、もちろんそんなことは、家畜はできません。しかし、ノアの時代、人が暴虐に陥って、それで地表にある生き物はみな滅んだのですから、家畜も含めて贖われなければいけないと考えたのは、あながち間違っていないですね。

3:10 神は、彼らが悪の道から立ち返るために努力していることをご覧になった。それで、神は彼らに下すと言っておられたわざわいを思い直し、そうされなかった。

ここです、主の憐れみがここに豊かに現れています。「わざわいを思い直し、そうされなかった」とあります。主は、滅ぼすという言葉が使われても、それは何が何でも滅ぼすものではありません。エ

ゼキエル書にこう書いてあります。「わたしが悪者に、『あなたは必ず死ぬ。』と言っても、もし彼が自分の罪を悔い改め、公義と正義とを行ない、その悪者が質物を返し、かすめた物を償い、不正をせず、いのちのおきてに従って歩むなら、彼は必ず生き、死ぬことはない。彼が犯した罪は何一つ覚えられず、公義と正義とを行なった彼は必ず生きる。(33:14-16)」神は運命の神ではないのです！「わたしは悪者の死を喜ぶだろうか。・・神である主の御告げ。・・彼がその態度を悔い改めて、生きることを喜ばないだろうか。(18:23)」という神なのです。逆に言うと、滅ぼされる者たちは最後まで立ち返らなかった、いつまでも心を頑なに悔い改めなかった、ということになります。

そしてイエス様が、当時のユダヤ人の宗教者たちにお語りになったのが、この点なのです。「マタイ 12:41 ニネベの人々が、さばきのときに、今の時代の人々とともに立って、この人々を罪に定めます。なぜなら、ニネベの人々はヨナの説教で悔い改めたからです。しかし、見なさい。ここにヨナよりもまさった者がいるのです。」四十日で滅びると叫んだヨナの言葉に、それだけで悔い改めたニネベの人々がいます。悔い改めというのは、いかに正しい行いができたか、ということではありません。どんなに悪いことをしていても、アッシリヤ人のようにどんな暴虐を働いていたとしても、それでも神の憐れみを信じて、へりくだり、立ち返ることです。その砕かれた心こそを憐れみの神は喜ばれるのであり、いかに自分がこれまで宗教生活をやってきたのかということに拠らないのです。ヨナの説教に比べれば、人の子であるイエス様はどれだけの恵みの言葉を語られたでしょうか？ どれほどの豊かな知恵と知識をもって語られたでしょうか？もし、それでも悔い改めないのなら、悔い改めて神の憐れみを受け、罪赦されたニネベの人々が、共にあなたがたを裁きますと言われています。

4A 怒る預言者と慰める神 4

「1テモテ 1:15 キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。」のです。そして、「ルカ 15:10 あなたがたに言いますが、それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちに喜びがわき起こるのです。」と主は、言われます。喜びがあるはずですが、しかしなんと、ヨナはここで激しく怒るのです。ちょうど、放蕩息子が家に戻って来たのに、兄息子が怒っていたのと同じ状況です。

1B 憐れみへの怒り 1-4

4:1 ところが、このことはヨナを非常に不愉快にさせた。ヨナは怒って、4:2 主に祈って言った。「ああ、主よ。私がまだ国にいたときに、このことを申し上げたではありませんか。それで、私は初めタルシシュへのがれようとしたのです。私は、あなたが情け深くあわれみ深い神であり、怒るのにおそく、恵み豊かであり、わざわざを思い直されることを知っていたからです。

ヨナ書の初めに書いてありませんでしたが、ヨナがイスラエルで主に命じられた時に、彼は祈りの中で申し上げていたのです。モーセが主の栄光を見える時に、主の御名が、このようなものでした。「情け深くあわれみ深い神であり、怒るのにおそく、恵み豊か」であるということです。ですから、

ニネベが滅びるという言葉語るなら、主は災いを思い直されるのではないですか？と言っていました。はたしてその通りになりました。これで、アッシリヤは滅びから免れて、力を持ち、イスラエルを滅ぼしに来るではないですか？ということです。

4:3 主よ。今、どうぞ、私のいのちを取ってください。私は生きているより死んだほうがましですから。」4:4 主は仰せられた。「あなたは当然のこのように怒るのか。」

ヨナの怒りは、もしかしたら正当なものかもしれませんが、けれども、パウロは、「怒っても、罪を犯してはなりません。(エペソ 4:26)」と言いました。なぜなら、「人の怒りは神の義を実現するものではありません。(ヤコブ 1:20)」とあるからです。自分は正しいと思っても、熱くなっていると、実は神の義が見えなくなってしまう。主のために働いていると思っても、実は主ご自身を出し抜いて、自分の義を立てて行くことが起こってきます。そこには、偶像を造ってしまいます。神の義よりも正しいと思い込んでいる、自分の願いや強い思い、信念、そのようなものが出来上がってしまいます。どんなに怒っても、主が何かを行なっておられるのです。それは裁きにまさる憐れみのご計画です。何かをされているのです。

2B とうごまを惜しむ心 5-11

4:5 ヨナは町から出て、町の東の方にすわり、そこに自分で仮小屋を作り、町の中で何が起こるかを覗きわめようと、その陰の下にすわっていた。

ヨナは、ここで思い直せばよかったのですが、不遜にもそれはしませんでした。むしろ、町の東の方から、はたして主が四十日後にご自分が言われた通りの滅びを下すのかを確かめようと思ったのです。「あなたが、このように言われたのになぜ行わないのですか！」という怒りがありました。

4:6 神である主は一本のとうごまを備え、それをヨナの上をおおうように生えさせ、彼の頭の上の陰として、ヨナの不きげんを直そうとされた。ヨナはこのとうごまを非常に喜んだ。4:7 しかし、神は、翌日の夜明けに、一匹の虫を備えられた。虫がそのとうごまをかんだので、とうごまは枯れた。4:8 太陽が上ったとき、神は焼けつくような東風を備えられた。太陽がヨナの頭に照りつけたので、彼は衰え果て、自分の死を願って言った。「私は生きているより死んだほうがましだ。」

主は、怒るヨナに対して、彼に対しても憐れみをもって戒められました。一つ、子供でも分かるような教材を与えられたのです。「とうごま」を生えさせました。「とうごま」は大きな葉を持っていて、暑くなると非常に早く成長します。種は、現在は化粧品原料や工業潤滑油にも使われ、「ひまし油」という下剤の中にも入っているそうです。けれども、その早い成長は、莖に少しでも傷がつくと枯れるという性質も持っています。それでこのような早く成長し、また早く枯れることが起こっています。そして、彼はまた死を願いました。彼は落ち込んでいるのです、あまりにも怒りで落ち込み、さらに鬱のようになっています。それで、上機嫌になって、再び死にたいなどと言っています。

4:9 すると、神はヨナに仰せられた。「このとうごまのために、あなたは当然のこのように怒るのか。」ヨナは言った。「私が死ぬほど怒るのは当然のことです。」4:10 主は仰せられた。「あなたは、自分で骨折らず、育てもせず、一夜で生え、一夜で滅びたこのとうごまを惜んでいる。4:11 まして、わたしは、この大きな町ニネベを惜しまないでいられようか。そこには、右も左もわきまえない十二万以上の人間と、数多くの家畜とがいるではないか。」

ヨナのところまで下りて来てくださった主は、彼にも悟ることができるように、ご自身の憐れみを教えられました。とうごまは、自分で生えます。けれども、それさえもヨナは枯れたことを惜しみました。しかも、僅かな間だけの命だった、とうごまを惜んでいます。ましてや、ご自分が造られ、その命を支えていたニネベの人々を、どうして惜しまないでいられようか？と言われていています。私はかつて小学生に聖書を教えていた時に、特に男の子には通じる言葉で話しました。「プラモが壊れたり、なくしたりした時、どれだけ悲しむかい？そんなに惜んでいるのと同じように、いやそれ以上に、神はみんなを愛しておられるのだよ。」

そして主は、「右も左もわきまえない十二万以上の人間と、数多くの家畜」と言われています。この右にも左もわきまえない、というのは、幼い子供に使われる言葉です。彼らは、幼い子供のように何を行なっているのかを分かっていない、ちょうどイエス様が十字架の上で、「彼らは何をしているのか、分かっていないのです。彼らをお赦してください。」と祈られた、そのわきまえのなさです。主がここまで憐れんでおられます。この憐れみの心をなかなか持ちにくいです。モーセも同じ怒りに過ちを犯しました。岩を二度打つことによって、「わたしを民の前で、聖なる者としなかつた。」とされて、モーセが約束の地に入らないようにされました。神はあのように、不満を言う民をあきらめておられなかったのです。

私たちには、これは正しいと考えていることから、自分がとても思っ、大切にしていることがあるから、かえって神の御思いを退けてしまうことがあります。あまりにもその正しいという思いが強いの、不満に思ったり、怒ったり、そして不正だと感じていることには憎んでさえます。ヨナのように、それが当然だと考えるかもしれません。けれども、はたして正しいのでしょうか？神は、その人が倒れないようにされています。それには、神の何らかの御心があります。むしろ、自分が間違っていると思っている人が神の憐れみによって立っているかもしれません。

また、ヨナと同じように宣教の思いが与えられる必要があります。それは、神が御子をお与えになるほどに世を愛され、御子を信じる者はひとりとして滅びることなく、永遠の命を持つためであるという心です。自分の思いの中で、「あの人たちはどうなってもいい！」と怒っている人々がいるかもしれません。それが国かもしれない、民族かもしれない。あるいは、異なる思想を持っている人かもしれない。自分とは正反対の信条を持っている人々かもしれません。けれども、主はそうした人々を汚れているとはせず、主がきよめた物を汚れた物と言ってはいけな、と言われます。信仰によって、その人を清めておられるのです。